

農業に生きる

Challenge to
My Dreams



米コンテストでは青壮年部で
最高金賞・県知事賞を受賞



毎年地元小学校の社会科見学を受け入れ

ワサビ生産者

かつまた けい 敬一郎 さん(44)

御殿場市上小林在住。ワサビを34アール、水稻を4ヘクタール栽培。御殿場山葵組合に所属。第40回全国わさび品評会で農林水産大臣賞を受賞。青壮年部御殿場地区本部の顧問を務める。

広い視野と行動力で地域農業を守る

ワサビ農家ならではの苦悩

勝又さんは岐阜県の専門学校を卒業後に自動車のディーラーで働き、26歳で実家の農業を継ぎました。「県外の学校に通い、農業以外の仕事も経験させてくれた両親に感謝している」と話し、「農業はやりたかったので、継ぐことに全く抵抗はなかった」と笑顔を見せます。

水ワサビは栽培できる場所が限られ、他の作物と比べて生産者が少なく、栽培方法が記されたデータがありません。栽培技術は先代から教えてもらったことがほとんどです。「父親は自身の経験と感覚を大切に『背中を見て学べ』という教え方

だったので、一緒に作業しながら一生懸命技術を磨いた。それが難しかった」と当時を振り返ります。

今では、全国品評会で最高位を受賞する他、地元の高級飲食店や宿泊施設などで勝又さんのワサビが使われるなど、高品質なワサビを生産する一人です。

高温対策で生産維持

栽培品種は「真妻」で、収穫まで約2年かかります。苗の植え付けは1年を通して行いますが、最近は異常気象により夏場の植え付けが変わってきていると言います。「近年は高温の影響で、ワサビの生育障害が深刻化している。今夏に植え付けたものは全滅し、これまでの被害と比べ物にならない」と苦労を語る勝又さん。

そんな中でも、高温対策資材を取り入れるなど、時代に合った新たな栽培技術を導入し、産地を守っています。植え付け時は、1本ずつ角度を変えることで害虫の防除につなげるなどの工夫

もしています。

米作りも守る

米も生産する勝又さんは、世代交代した生産者が米作りの知識で苦労していることを知り、JAに水稻栽培の勉強会を提案しました。「栽培方法を知らなければ、いつか米の栽培をやめてしまい、担い手が減少してしまふ。青壮年部員として、JAと一緒に生産者の減少や遊休農地の増加をくい止める活動をしたい」と力強く語りました。

地域の農業全体にも目を向ける広い視野と行動力を持つ勝又さんは、若手生産者をけん引し、産地を守り、次世代へつなぐ活動に励んでいます。

営農アドバイザーから

ワサビトップ営農指導員 修善寺営農経済センター 日吉 新

御殿場地区のワサビは、全国わさび品評会で毎年のように最高位を受賞するほど質の高いワサビを生産しています。静岡県発祥の栽培方法「畳石式」で使用する砂利や石の代わりに、富士山の噴火で出来たスコリアを利用する「北駿式」に改良された栽培方法が受け継がれています。

本年度は、品目別振興計画を軸に高温対策に向けた取り組みを行い、ワサビの品質維持と出荷量の確保に努めています。



ワサビ

御殿場市・小山町では富士山からの豊富な湧水でワサビが栽培され、辛みと粘りの強さ、豊かな香りと甘みが特長です。御殿場山葵組合では「真妻(まづま)」を主に栽培しています。全国わさび品評会で最高位など上位入賞を果たし、都内の市場でも高い評価を得ています。



営農担当者に栽培を相談する勝又さん(右)

